

未来へつながる近代建築を見る



▲2階にベランダを設けた旧柳原学校(近江八幡市安土町 近江風土記の丘)

「百年建築」とは、明治以降から戦後すぐの頃までに建てられた建築物を指している。今回の特集にあたって、みくなが見つけた言葉である。魅力ある湖北の「百年建築」モデルを紹介したい。

すべての建物がオリジナル

「百年建築」といっても、百年以上を経た建物もあれば、経ていない建物もある。もっとも早い時期の建物としては、明治7年(1874)建築の旧開知学校や明治15年(1882)の旧長浜駅舎がある。余呉町下余呉のべんがら座や、次号で紹介する長浜市役所本館などは、戦後すぐの建物である。両者のあいだには、およそ80年の開きがある。

これらに共通するものは何か。まず第一に、およそ百年前後にわたって、地域の人々に親しまれ、活用されてきた建物であることだ。風雪に耐え、磨かれてきた歴史の重みがある。風景の一部となつて、町並みに溶け込んできた文化の積み重ねがある。

第二に、すべての建物がオリジナル作品であることだ。湖北の風土に合った建物として

設計され、地域にゆかりの造り手によって、地域で調達した材料を使って建てられた。だから、湖北でしか生まれなかったオリジナルな建物なのである。

これらの建物を現代にのみがえらせ、活用していくことは、湖北のオリジナルティを引き継いでいくことになる。それは、結果として観光のシンボルとなり、あるいはコミュニティに活力をもたらす契機となるに違いない。

開知学校は擬洋風期のモデル

明治以降、在来の伝統的な建築様式や工法とは異なる、あるいは伝統に新たな建築様式と工法を取り入れた、いわゆる近代建築が建てられる。その後、近代建築は様式や技術も少なからず変遷してきた。それは時代によっておよそ4期に分けられる。明治前期までの擬洋風期、明治後期の学習期、大正時代の変

革期、そしてそれ以降のモダニズム胎動期である。(「湖国のモダン建築」石田潤一郎・吉見静子・池野保共著を参照)

まず擬洋風期の代表例は、旧開知学校(11頁参照)。昭和12年(1937)の建物移転時に当初の様式が一部なくなり、平成12年(2000)にその一部が復元されている。屋根に櫓が乗り、3階にベランダが付いた。当初の様式はベランダコロニアル。明治後期にベランダ下見板コロニアルに改修され、現在は再び当初の様式に戻っている。

ベランダコロニアルの源はイギリスにある。18世紀後半にイギリス人がインドへ進出した際に、暑さ対策としてベランダを取り入れた。コロニアルとは植民地という意味。それが中国を経て日本に伝わった。その典型例はグラバー邸(長崎市)だ。

一方、下見板コロニアルの源もイギリスにある。アメリカ大陸の開拓時代に、現地に豊富な木材を刻んで組み立てる簡便な技法として、アメリカ大陸を東から西へ伝わり、太平洋を渡って日本へ伝えられた。こちらの典型例は札幌時計台。

地球を東回りで半周してきたベランダコロニアルと、西回りで半周してきた下見板コロニアルが、最終地である日本で合体してベランダ下見板コロニアルが生まれた。

変革期からモダニズム胎動期へ

明治後期の学習期の建物としては、黒壁本館がある。純粋に日本人の設計・施工によるが、土蔵造りといい、内部の格天井といい、伝統的な様式や技術をもとに、新しい技術と様式を学び、取り入れていく時期の建物である。

大正時代の変革期の建物としては、長浜市鍛冶屋町、西浅井町塩津、米原市醒井などにある旧郵便局舎や樋口株式会社(長浜市)の旧事務所などがある。木造2階建てのコンパクトな建物だが、壁はモルタル塗や下見板張りなど様々で、多様な様式に変化していく時期の建物である。

最後にモダニズム胎動期

この例を選び出すのはむしろ難しい。湖北にモダニズムの流れが届いてきたであろうか。時代背景から見て困難だったのでは。た



▲下見板コロニアルの魚友楼洋館(旧八幡警察署武佐分署庁舎)(近江八幡市)

建築用語メモ (みくながスタッフのようなビギナー用)

- ・下見板張り 板を横に用い、板の下端が、その下の板の上端に少し重なるよう取り付けた壁
- ・押縁下見板張り 下見板に細い材を垂直に当てて押さえた壁
- ・ささら下見板張り 押縁にささら(階段状に切れ目を入れたもの)を使った下見板張り
- ・方杖 柱と梁のような構造材を補強するために斜めに取り付ける部材
- ・掃付け仕上げ モルタル類をささら(竹や細い木などを束ねた道具)などで掃き付けて壁面などに付着させ、粗い表面を作り出した仕上げ。通称「ドイツ壁」
- ・引き違い窓(戸) 左右に引いて開ける窓や戸
- ・上げ下げ窓 上下に引いて開ける窓
- ・観音聞き 左右両側に開く窓や戸
- ・鑑戸 羽板を取り付けた建具。風通しがよく、風雨や直射日光を防ぐ
- ・コーナーストーン 外壁の角部分の補強のために積まれる石
- ・寄棟造り 棟から四方に流れる屋根の形状
- ・切妻造り 棟から両側に流れを持つ屋根の形状

旧街道に馴染んだ洋館



▲昭和48年から25年間使用されずにおかれていた建物は、平成10年、登録文化財となり、同12年、醒井宿資料館としてオープン。まちの観光資源として活用されている



▲建築当初の醒井郵便局

築年 大正4年(1915)創建、昭和9年(1934)改修
 設計 ウィリアム・メレル・ヴォーリズ
 施工 不詳
 構造 木造2階建 寄棟造
 登録有形文化財(平成10年)

中山道の宿場町として栄え、今もその面影を残す醒井。この街道沿いに石造り(風)の洋館がある。

正面に配された6本の柱は「ピラスター」(付け柱)といい、その頭の方に付いた飾りは「アカンサス飾り」というが、これらの形は、素人にも古代ギリシャ建築を思わせる。迫力の石造りに見える外壁は、実は、モルタルを厚く塗った「石壁風」で、内部は純粋な木造建築だ。

大正4年(1915)に醒井郵便局として建てられたもので、施主は、現在の館長・山岸宏さんの祖父で、当時の郵便局長だった憲雄さん(1873~1955)。アーチ形の窓の上に飾られた古い看板、上部に掲げられた「醒井郵便局」の文字、表にある現役筒形のレトロなポストも、かつて郵便局であったことを物語る。

設計は、アメリカ人のウィリアム・メレル・ヴォーリズ(31頁参照)で、創建当時は下見板張りの木造の洋館だった。

「祖父がどこでヴォーリズさんと知り合い、どんな経緯で設計を依頼したのか、詳しいことは分からないのです」と山岸館長。

その後、昭和9年(1934)に現在の形に改修され、昭和48年(1973)まで郵便局として使われていた。改修時の設計も「ヴォーリズによるものとの見方もあるが、確認はされていない」



▲建物裏側の一部で、元の下見板張りが確認できる



▲2階のようす。電話交換室や女子の休憩室だった手前の和室は資料の展示室となっている。障子の向こうは洋風の造りで、上下の引き違いや観音開きの窓が付いている



▲屋根の形を見ると、当初の寄棟の建物が活かされていることが分かる



▲屋根瓦に見られる郵便局のマーク



▲入り口付近に復刻された電話ボックス。スリッパが並ぶところにカウンターの跡が見られる



▲山岸宏館長

●米原市醒井宿資料館

米原市醒井 592 電話 0749-54-2163

営業時間 午前9時~午後5時
(入館は午後4時30分まで)

定休日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)、
年末年始(12月27日から1月5日)

入館料 大人200円、小中学生 100円

というのが、多くの建築家の見解のようだ。さらに、平成11、12年におこなわれた保存修理工事において、「ヴォーリズの設計によるのは創建当時のもののみ」ということが実証されたという報告書もある。

一方、現存するヴォーリズが描いた設計図と、古写真に写る創建当時の建物には相違点があり、何らかの理由で設計が変更されたようだが、詳しいことは分かっていないという。

外観のモルタルの下には下見板張りの外壁が健在で、一部、その様子を確かめられる場所がある。また、当時のままの木枠の窓ガラスや鉄製の鍵、滑車で開け閉めする、当時としては最先端だったであろうロールスクリーンカーテン、磨き込まれた木造の手すりなども見どころといえる。

元の局長室は、現在、館長室として現役、入り口近くにはかつての電話ボックスが復刻され、2階にあった電話交換室や女子の宿直室兼休憩室は、醒井の歴史資料の展示室となっている。

山岸館長は、小さい頃、この洋館と隣接する自宅を行き来し、当時、郵便と電信電話業務を手掛けた記憶や、局長室、集配の棚があった場所などを、懐かしそうに説明してくれた。ちなみに、純和風の自宅もヴォーリズの設計とのことだが、こちらも詳細は不明だそうだ。

ヴォーリズ没後50年を記念し、県内のヴォーリズ建築を描いた記念切手が今年10月発行される。来年、創建100年を迎える旧醒井郵便局の創建当時の写真も印刷される予定だ。

(千)